オーちゃん

札幌医科大学医師会

浦澤　正三

痩せぎすで覇気がなく無口な子だった。いつからか身近にいた２人の姉達は彼を「オーちゃん」と呼ぶようになり、本人は抵抗を感じながらも異を唱えることもなく幼少期を過ごした。

「オーちゃん」は札幌市の郊外、円山村で生まれた。だが、生後間もなく引っ越したため、覚えているのは父親が札幌市内の南１条西６丁目で青果物卸売業を始めた昭和15年頃以降のことである。彼の３歳と６歳下の弟と妹はここで生まれた。

忙しい商売人の家に生れた「オーちゃん」がどのように育てられたか、今は知る由もない。ただ下の弟や妹たちを見ていると、目を離せない授乳期は、母に背負われるか、目の届く場所で“嬰児籠（いずこ）”（藁で編んだ大きな籠）に入れられて過ごし、這い這いができるようになると、鞍のある幼児用歩行器に入れられ家人に見守られて過ごしていたので、似たような状況だったろうと思っている。

「オーちゃん」４～６歳の頃である。周りの大人たちは皆多忙で子供にかまっている暇はなかった。当時近所には、ヨッちゃん、タダオちゃん、フミオちゃんなど同年代の子が沢山いたが、自閉的な「オーちゃん」はせいぜい家の前や庭先で１人遊びをする程度で、外で彼らと遊ぶことはない。

家にいて一体何をしていたのかよく憶えていない。ただ、忙しく台所仕事をする母の後をついて回り、その一部始終をじっと見ていたことは記憶している。また、部屋の隅っこに坐ってぶつぶつ言いながら自分１人の世界に籠もって過ごしていたこともおぼろげに憶えている。

「オーちゃん」に母がよく言っていた言葉がある。“メソ”－彼はよくシクシク、メソメソ泣いた。“グズ”－彼は決断力に欠け行動に移るのが遅い子だった。“神経質”とも言われたが、ある時期、爪を噛んだり目を瞬いたりする癖があった。

小学校に入ってからは、近所の子供達の石蹴り、かくれんぼ、パッチなどの遊びを傍で見ていて誘われることもあったが、滅多に加わらなかった。スキーに誘われたこともあるが、斜面を滑って加速度がつくと、胸中を冷風が吹き抜けるようで息が詰まり恐怖で目を開けていられず転んでしまうので止めた。ぐるぐる廻す縄の下を子供達が次々と潜り抜ける縄跳びも、縄の回転に合せてタイミングよく足を踏み込むことができず失敗してしまう、といった具合で、遊び、運動のできない社交性に欠けた子供だった。

実は、「オーちゃん」は、物心ついて以来のこの方、次第に頭を擡げてきたある重大問題に直面していました。運動は別にして、遊びに参加できないのもこのことが大いに関係しています。それは“自分”という存在を言葉で表現できないということです。石蹴りなどに誘われて遊びの仲間に入っても、最初にじゃんけんで決められた順番になった時に「自分の番だ」と言えないため抜かされてしまう。パッチで遊んでいても「このパッチ誰の？」と聞かれた時に「自分の」と言えないために締め出されてしまうといった具合です。

「オーちゃん」は考えます。「どう言ったらいいのだろう」－－。俺？　とんでもない、自分は俺なんて威張れるほど強い子じゃない。僕？　いや、それほど育ちの良い男らしい子でもない。それなら私？　いや私では男か女か分らない。では自分？　いや大人が言うみたいで変だ。ならば正三か正ちゃんのどっちかだろうが、正三なんて堅苦し過ぎて言えないし、正ちゃんも自分のことを－－ちゃんなんて恥ずかしくて言えるわけがない。

その点、近所の石田食酢工場の子・よしほちゃんは、体が大きく、性格は明るく素直で、正義感が強く、他人の面倒見もよく、この界隈の子供達に一目置かれるリーダー的存在ですが、遊びの中でも必要な時には、「僕の番だよー」「ヨッちゃんのだ」「よしほのものだよー」とはっきりと主張できる。こんなヨッちゃんを、「オーちゃん」は心底尊敬しています。

遊びだけなら遊ばないで済むのですが、近くにいる２人の姉、特に日常、何かと世話を焼いてくれる下の姉とのやりとりの中で、しばしば困った事態が生じました。親しい姉ですから言いたいことを言いたいのですが、やはり話の中で“自分”が言えないために思っていることを伝えることができないのです。話がぐるぐる廻りで、どうしても分ってもらえず、悔しく情けなく、ついに泣き出してしまうこともありました。

そんなことを繰り返す内に姉も気が付いて、逆に「正ちゃんがやったの？」「正ちゃんの物？」と尋ねてくるようになり、ほっとして私は「うん」と頷きます。するとそのうちに姉は、「誰が？」「誰のもの？」と聞いてくるようになりました。内心「分かってるじゃないか」と思いつつ、あまりのしつこさに、つい口を漏れ出た誤魔化しの言葉が「ə－ちゃん」（実はアとオの中間）だったのです。それ以来、姉たちは私を「オーちゃん」と呼ぶようになりました。

外では自分を主張できない男の子、家では「オーちゃん」と呼ばれた子供時代は小学校卒業まで続きました。実はそれ以後も高校まで自分自身の呼び方には拘りを懐いていて、相手次第で私、僕、俺が言えるようになったのはずっと後のことです。

以上が、幼年期に私が姉たちから「オーちゃん」と呼ばれた経緯です。

自我形成期において、全ての子供は自分を意識し、その存在を主張する時期があったに違いありません。他の人びとはこの時期をどう乗り越えていったのだろうか、など訊ねてみたい気がします。